

「水土を守る人々」では、農業や農業用水の役割とこれらが持つ多面的機能等が十全に発揮されていくために、農業水利施設等の維持管理を支える人々の日常にスポットを当てて、その取り組みを紹介することで、農業農村整備や多面的機能の発揮が「人」の支えの上に成り立っていることを伝えていきます。  
※不定期で掲載いたします。

### 南北に広がる受益地で歴史ある施設を緻密に操作管理！

～信濃川左岸土地改良区 業務課長 こばやし たけし 小林 健 氏～ 新潟県長岡市

今回「水土を守る人々」で紹介するのは、信濃川左岸土地改良区に勤務する業務課長の<sup>こばやし</sup>小林<sup>たけし</sup>健さんです。米どころとして有名な新潟県のほぼ中央に位置する信濃川左岸土地改良区は、平成29年8月に着手された「国営信濃川左岸流域土地改良事業」の受益地（4,501ha）の大部分を占める、4,107haを受益とする土地改良区です。



水管理システムを操作する小林課長

受益地内に張り巡らされた約80kmにもわたる国営幹線用水路のほか、約20kmの排水路、3箇所<sup>の</sup>頭首工、54箇所<sup>の</sup>揚水機場、5箇所<sup>の</sup>排水機場を24時間体制で管理しています。日頃から職員の指揮をとり、この維持管理作業を適正に実行するとともに、緊急時は昼夜に関わらず本人自ら現場に赴き、迅速に対応されているのが小林さんです。

#### 1. 現在の業務での苦労話

小林さんは高校を卒業してから信濃川左岸土地改良区に就職し、今年で32年目です。現在は施設の維持管理が主な業務ですが、以前は会計業務やほ場整備事業を担当していました。「配水操作の経験が無かったため、洪水・渇水ともに対応が遅れたことがありました。」と話し、「最初は地区内に水を行き渡らせるのは当たり前というプレッシャーに苦慮しながら業務に当たっていました。」と当時の苦労を振り返ってくれました。

## 2. 歴史ある施設を維持管理する心構え

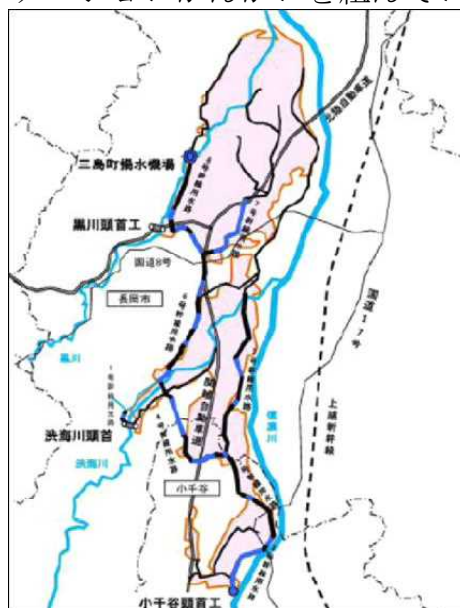
この地域は古くから水不足の問題を抱えており、時には死者が出るほど激しい水争いが起こっていたそうです。この水争いを解消するため、国営信濃川左岸農業水利事業が実施されたとのことでした。この事業の着手は昭和21年からと戦後間もない動乱の時代でしたが、当時の用水事情の厳しさや食糧増産地域としての期待も後押しし、国営事業として全国に先駆けて着手（国営新利根川農業水利事業の着手と同年）されました。この事業によって、信濃川に取水施設が整備され、安定的な取水が実現しました。「国営第1号と昔から言われており、それに恥じないような施設管理をしていきたいです。」と、歴史ある施設を維持管理していく心構えを語ってくれました。

## 3. 渇水被害を乗り切ったローテーションかんがい

昭和後期、ほ場整備が進むにつれて水利用に変化が生じ、用水不足が顕著に表れてきました。これに対応するため、昭和62年から地域内の一部で揚水機場の運転がローテーションで行われ始めたそうです。その後、地域全体でローテーションかんがいが行われるようになり、平成3年にはほぼ現在のローテーション体制（4月21日～7月10日：2日運転・1日休み、7月11日～：2日運転・2日休み）になったそうです。そのような中、平成6年には、渇水による干ばつ被害が全国的に発生しました。しかし、信濃川左岸土地改良区はこのローテーションかんがいを組んでいたために、渇水被害を最小限とすることができたとのことでした。それまでは、農家から「なんで毎日水を流さないんだ、毎日水が必要なんだ。」といった連絡が入ることもあったそうですが、渇水被害を乗り越えることができた頃から、組合員のローテーションに対する意識が高くなってきたとのことでした。

## 4. 南北に広がる受益地での緻密なゲート操作

信濃川左岸土地改良区の受益地は南北約20kmにわたり、東西は約2～6kmと細長い地形です。末端まで水が届くのに約8時間も要するため、午前3時半



南北に広がる細長い受益地

頃から通水作業を開始する必要があるほか、受益地内の3路線全てを点検するのに約3時間も費やさなければならないそうです。

また、信濃川からの取水施設である小千谷頭首工の管理業務も気が抜けません。小千谷頭首工の上流に位置するJRの水力発電施設が、JRの朝夕のラッシュに併せた発電（取水と放流の繰り返し）を行っており、1日の水位変動が約30cm以上ととても大きいとのこと。そのため、「信濃川の水位が高いと超過取水を意識しなければならず、逆に水位が低い際にゲート操作を怠ると下流の受益者の方から『水が足りない』と連絡が入るため、時間によって緻密なゲート操作を求められます。」と、日々の管理業務の難しさを話してくれました。



小千谷頭首工付近での水位変動

## 5. 全国初の事業への期待

近年、信濃川の川幅が広がって水位が下がったことや施設の老朽化により、安定的な取水に支障が生じているとのこと。特に農業用水路と河川の兼用区間が問題となっています。「河川と農業用水路の兼用区間の問題は2点あります。1点目は、河川の水が合流する用水の邪魔をして、用水路から必要な水量が流入していかないことです。本来ならば取水できるはずなのに、用水の流れが阻害され取水が困難となっています。2点目は河川のゴミが除塵機に詰り下流の約4,000haの農地に水が流せなくなってしまうことです。除塵機にゴミが詰まった場合は、夜間でもゴミの撤去を行うこともあります。」と、土地改良区が抱える悩みを話してくれました。



降雨時の様子



豪雨後の水路

これに対応することを目的の1つとして、平成29年8月から、「国営信濃川左岸流

域土地改良事業」が着手されました。シールド工事によって農業用水路の路線変更を行い、河川と分離することで、兼用区間の問題が解消されることが期待されています。全国で初めて国営水利システム再編事業（農地集積促進型）に採択され、この事業に大きな期待を寄せているとのことでした。

## 6. 職場の上司から

「毎日の施設の維持管理業務に責任感を持って対応してくれており、とても頼もしい存在です。」と話したのは、小林さんに絶大な信頼を寄せる同改良区の大塚事務局長さんです。「次世代を担う職員の見本となりつつ、国営事業を含めた改良区の全容を後世に引き継いでくれることを期待してます。」と話す一方で、「小林さんは責任感が強い上に、特に通水期間中は日々、心身ともに休まることが少ないため、健康面を特に心配しています。」と過去に自身も経験した業務課長というポストの大変さを話されました。



インタビュー風景

【左から、小林業務課長、大塚事務局長】

真面目な人柄の小林さんが日夜奮闘しながらも地域の用排水管理を担っておられることに敬意を表したいと思います。今後、本格化していく事業とともに、地域が益々発展していくことを祈念し、ご紹介とさせていただきます。

【北陸農政局農村振興部設計課】